

まいづる  
元気人

## 魚を知れば 食べたくなる

お魚かたりべ 嶋田 善文 さん

日本人の「魚離れ」が問題視され始めて久しい。それは港町の舞鶴も例外ではない。そんな中、魚に親しんでもらおうと小学校や幼稚園・保育所などでお魚の出前授業に取り組み、平成26年に魚食文化の普及・伝承に努めている人を任命する水産庁の「お魚かたりべ」に京都府下で初めて選ばれた嶋田さんにお話を伺いました。

## 皆さんの協力あつての出前授業

魚について詳しくなつたのは水産物加工業の職に就いてからだ。それまでは「魚は好きでよく食べる」程度だったという。しかし、仕事で魚介類に触れるようになるほど、どんな加工や調理ができるのか、など調べていくうちに、魚についてどんな人にも、もっと多くの人に知ってほしいという思いが強まってきた。

子ども達と関わるきっかけとなつたのは十数年前。府の水産課から「地元の魚介類を学校給食で子ども達に食べてもらいたい」との相談を受けたことだった。実施に向け話し合いを重ねると、自分たち生産者に「子ども達に魚へ興味を持ってもらいたい」という思いがあるように、学校側も「魚について授業をしたいが良い方法はないだろうか」と互いに思っていることが分かってきた。

それから学校や幼稚園・保育所の協力を得て出前授業を実施するようになった。生産者だけでは子ども達に授業をすることはできません。時間割に出前授業を入れてもらうことなど、学校や先生の協力の上にならなければなりません。子ども達とつみれを作る体験をした時に

は、加熱温度や時間など食品衛生面で尽力してもらったおかげで授業を開催することができました。私はあくまで出前授業に取り組みメンバーの内の一人なんです」と振り返る。

## 魚が舞鶴の活気につながる

出前授業などの活動の大切さについて何うと「海に面した舞鶴にとつて、水産業は一つの大きな産業基盤。魚を知らない、興味がない子ども達も将来水産業に携わる可能性は高いといだろうし、日ごろ魚を食べる機会も少ないと思います。担い手不足が叫ばれる今、家業だから継ぐという人だけではなく、きちんと収入を得られる仕事であることが、担い手を増やすためには必要だと考えています」と水産業に携わる立場からの考えを教えてくださいました。授業を受けた子ども達から将来水産業や魚介類の研究の道に進む子どもが1人でも出てくれれば、そんな可能性の種をまく活動だと位置づけているそうです。

将来、授業を受けた子ども達も買い物をしながら「赤い魚はね、海の底に住んでいるんだよ」と自分の子どもに教えてあげられる風景が見られる日はそう遠くはないだろう。

## 「体験」で魚に興味を持って

「海の底にいる魚はなぜ派手な赤い色をしているのか」と聞かれてきちんと説明できる人はそう多くないだろう。出前授業では小学生にこれを教える。自作した赤い魚と青い魚の模型に青いフィルムを重ねると、青い魚の姿はくっきり見えるが赤い魚は真っ黒に消えてしまった。こうすれば子ども達にも楽しんで覚えてもらえる。

自身が小学生の頃、オタマジャクシに手足が生えてカエルになるまでを、教室で飼育し、日々成長していく様子を観察しながら教えてもらった経験が「実際に体験する学び」の原点だ。教科書を開いてノートを取って学んだ内容は忘れても体験した驚きや学んだことはいつまでも忘れない。

どうして海底に赤い光が届かないかを説明すると物理の難しい話になる。しかし、実際に赤い魚が見えなくなるところを見せれば子ども達にもわかってもらえる。こういった体験や驚きが子ども達の魚に対する興味のきっかけになってくれたらと話す。

まいづる  
花図鑑

vol. 137

アジア中部から北部に分布する多年草で、明治時代に渡来し、庭などに植えられている。地を這うように伸びる太い茎は枝分かれし、大きなものでは幅15cm、長さ20cmを超すうちわのような葉を数枚付ける。葉は肉厚で水分を蓄み乾燥には強いが多湿には弱い。早春、茎の先から太い花柄を出し、桃色の花を数個付ける。石垣の上などで水かけのよいところに植えるのがよい。

名前の由来は、ヒマラヤ地方で育つユキノシタの仲間から。  
【協力】瓜生勝朗  
市文化財保護委員（植物分野）



ヒマラヤユキノシタ

(ユキノシタ科)

見ごろ 2~4月頃

